

# 祭器埋納は隣国への呪禁にあらず

## 見過ごされてきた南海トラフ地震

10408 田口 紘一

弥生中期前半から中期後葉（前2世紀～紀元1世紀前半）において北部九州では武器形祭器、出雲や瀬戸内、近畿では銅鐸という祭器が埋納されることがあった。

出雲地方では、1984年7月、島根県斐川町荒神谷遺跡で銅劍358本の大量一括埋納が見つかり、続いて翌年7月にはわずか7m離れたところから、銅鐸6個と銅矛16本の埋納坑が発見された。さらに、1996年に荒神谷遺跡から約3キロ離れた加茂岩倉遺跡から39個の銅鐸が発見された。「景初三年銘三角縁神獸鏡」が出土している神原神社古墳も近くにある。

祭器埋納の考えられる理由として、①廃棄説（銅鐸のマツリが終わり不要となって地中に埋めた）、②土中保管説（聖域の地中に埋めて保管しマツリの時に掘り出して使用した）（佐原真、三品彰英氏）、③隠匿説（銅鐸を地中に隠した）、④境界埋納説（生活していたムラの境界に邪悪なものの侵入を防ごうとした）（寺澤薫氏）などがあげられている。

三品彰英氏は銅鐸は地霊や穀霊の依代（よりしろ）であり、大地に納めておくことが大切なことで、銅鐸を掘り出すことは地霊・穀霊を地上に迎えまつること（地的宗儀）であり、まつりが終わると再び大地へ埋め戻されたとする。

また、石橋茂登氏（「銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察」『千葉大学人文社会科学研究所』第22号、2011年）は、全国の墓の副葬ではなく、墓以外の所で埋納された銅鐸や武器形青銅器の埋納状況に共通性があることから、「要するに諸説あるが、銅鐸と武器形青銅器の埋納方法が類似する理由を説明し、両者を統一的に説明できる論はまだない、と言って良い。」として、議論を始められている。そしてまとめとして、「埋納が北部九州ではなくそれより東で始まった可能性を考えると、銅鐸埋納と武器形青銅器埋納は強く密接な関係にある。・・・武器形青銅器と銅鐸は相容れないものではなく、島根県荒神谷・広島県木の宗山・徳島県源田・兵庫県桜ヶ丘といった実例が証明するとおり、一括して埋納できる道具であり、祭祀もそのような性格のものだった」とされている。

埋納時の祭器の姿勢は、武器形は刃を下に向け、銅鐸は立てた状態、つまり鐸を吊るす部分を上にして置くのではなく、横倒しにして、しかも鱗の部分を下に向けているという。武器形はともかく銅鐸の埋納姿勢は異常ともいえる。

私はそれが何かの祈りのためであるならば、それは大地に向かってのものではないかと考えた。

## 福岡平野の武器形祭器の埋納

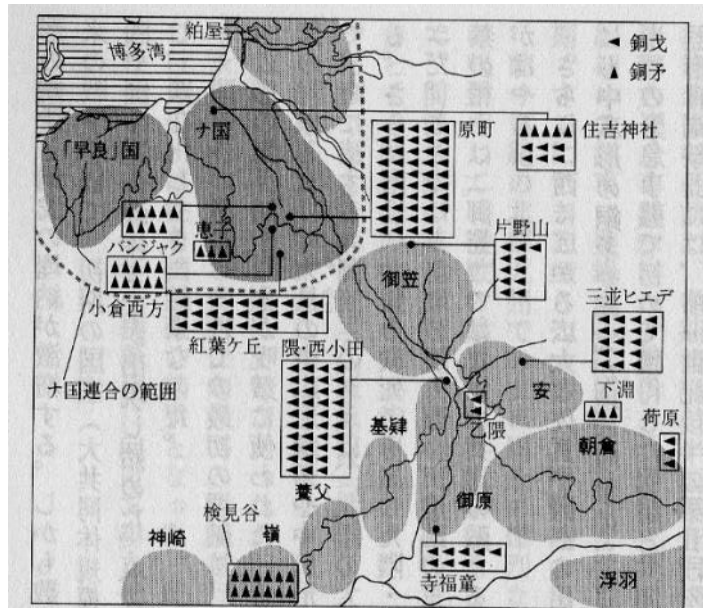
北部九州では福岡平野のクニグニで武器形祭器の埋納が弥生中期前葉（前2世紀）から行われている。

寺澤薫氏（『王権誕生』講談社2000年）は、この埋納を戦争の相手国に対する呪禁と捉えられておられる。例えば、北部九州での埋納の様子について、図1を掲げ、

「たとえば、福岡市博多区住吉神社遺跡の計11本の中細形銅戈と銅矛の埋納は、那珂川の対岸のクニを呪禁しようとした、ナ国内部のクニ同士の緊張感増大の結果だろう。しかし、戦争の規模が小共同体やクニ同士の段階（マツリの第I段階）では、まだシンボルを大量に呪禁に使うほどには至らない。小共同体やクニ同士の争いは、依然、階級的首長の軍事的、政治的裁量が大きく、祭器化しつつある青銅の武器もまだ彼の墓にこそ納められることが必要だったのである。

ところが、中期後半（マツリの第II段階）[前1世紀後半～1世紀前半]になると、より身幅の広い中広形の銅矛と銅戈の埋納が激増する。しかも数十本をまとめて埋納することもある。前期末以来の戦争を経て、初期の国家（大共同体規模のクニ）が北部九州各地に成立し、さらに国や国の連合政体までが出現し始めた。外に向けての権力のぶつかりあいが一層大規模化し、顕在化してきた結果なのだ。

ナ国の外のクニへ向けての最初の埋納は、領域南端の春日市原町三丁目遺跡で、中細形と中広形の銅戈48本が呪禁に使われた。その後、後に太宰府水城が築かれた丘陵の南を呪禁の対象として、大量の中広形銅矛や中広形銅戈が次々と埋納され続けたのだ。これに対して、南に接する「御笠」のクニは、北端の大宰府片野山遺跡の中広形銅戈11本で対抗する。さらに南は、大量の戦死者を出した隈・西小田遺跡や横隈狐塚遺跡のある「御原」のクニだ。ここでは、北端の隈・西小田遺跡の38本の中広形銅戈が彼らを守る。しかし、呪禁の相手は「御笠」ではない。共通の敵たる強大なナ国だったのではないか、と勝手な想像がはやる。



寺澤薫『王権誕生』図「ナ国と周辺クニグニの呪禁」より

図1 福岡平野・筑紫平野の祭器埋納状況

さらに、西に広がる広大な佐賀平野への出入り口や、南の筑後川を越えたクニグニの境界にも中広形の銅矛や銅戈が境界呪禁のために大量に埋納された。銅鐸が中期末（1世紀前半）の緊急事態で初めて獲得した呪禁と共同体そのものの守護という観念は、北部九州の武器形青銅器には、前1世紀後半の第Ⅱ段階の当初から、すでに十分過ぎるほど付加されていたのである。」

と詳しく述べられておられるが、しかし、次のような疑問も呈しておられる。

「もう一つ興味深いことがある。北部九州の中枢地域でありながら、ナ国の北の「胸肩」「粕屋」のクニや、西の「早良」国、イト国、マツロ国地域には、武器形青銅器の埋納例がほとんどないのだ。つまり、かつては最も戦争が頻発した地域でありながら、呪禁という行為がない。」（下線は筆者加筆）

そして、この現象の原因として、福岡平野のナ国連合と糸島地方のイト国連合は、その間に挟まれて存在する早良国の仲介によって早くから結ばれていたのではないかと想像されておられる。

しかし、不思議なのは、図1において、「バンジャク、小倉西方、原町、紅葉ヶ丘」のいずれもナ国の中、それも中心部にあることだ。寺沢氏は、原町は領域南端とされているが、ナ国の中心、須久遺跡群（現在、春日市「奴国の丘歴史公園」となっている）から東南東わずか1kmのところなのだ。とくにバンジャクはその「歴史公園」の敷地内であり、ナ国王墓やそれを取り囲むように存在する鉄・銅の工房跡のすぐ近くである。ナ国王墓、鉄・銅工房、バンジャク遺跡、小倉西方遺跡、原町遺跡は直径2キロの円内に入る。これらの遺跡はナ国の中枢部にあるのだ（図1のナ国の領域は南北約8キロ、東西約6キロもある）。

図1に示す御笠のクニの埋納地も対ナ国を意識したものとしては、位置が不自然である。しかも、この御笠のクニの埋葬地、片野山の位置は九州国立博物館の発行書籍（『太宰府天満宮の地宝』）によると、江戸時代福岡藩の国学者、青柳種信が藩から命ぜられて『筑前国続風土記拾遺』の編纂をしたが、その中で種信は次のように記しているという。

「天明四（1784）年2月6日、宰府村の清太という牧童が高雄山の南の尾根で薪を取っていたところ、六反田の西で11本の銅矛を発見した。大きい矛で長さ一尺三寸・幅三寸（約45.5センチ、9.1センチ）、小さい矛は長さ一尺二寸五分、幅二寸五分（約37.9センチ、7.6センチ）あり、それらは現在、大宰府天満宮に納められて神宝となっている」。

また福岡藩の記録にも、同じ日のできごととして、郡奉行所からの報告書に次の記述があるという。

「宰府村百姓の清太郎が松葉かきに出かけ、片野山六反田の岸の崩れ口で銅矛11本を掘り出した。格別の古物で、何らかの由緒もありそうな品なので、天満宮に神納し、永

く同社で相伝するように取り計らった」

さらに、文化三（1806）年作成と考えられる「太宰府旧蹟全図（北図）」に、高雄山（高雄城）の南へ伸びる尾根の先に「六反田」の地名、そして「○ドウホコイツル（銅矛出づる）」という書き込みがある。

そして、青柳種信がスケッチしたと伝わる「大宰府聖廟神宝銅矛図」には「御笠郡宰府村片野山掘出銅矛図」と書き込まれている。

以上のことから片野山は高雄山のことであり、青柳種信自身も高雄山と記したり、片野山と記したりしていたことがわかる。

その高雄山（片野山）の銅矛（銅戈であるが当時は銅矛と考えられていた）出土地は「太宰府旧蹟全図（北図）」から太宰府天満宮の南東約2キロの現在高雄公園となっている付近であろうと推測される。そこは図1で濃い色で示された御笠のクニ領域のほぼ中央にあたる。御笠のクニの北端辺ではなくど真ん中なのだ。

安のクニの三並ヒエデ遺跡の位置も隣国との境ではない。安のクニの東北の方は山地でクニはない。隈・西小田遺跡は確かに御原のクニの北端に近いと見られるが、寺福童遺跡は御原のクニの南端にあって、南に向かって呪禁していると寺澤氏は言われるが、寺福童の南は今の筑後川まで3キロくらいは筑後川の暴れる範囲で当時は湿地で人家はなかったであろう（図1でも国は隣接しておらず、空白地になっている）。御原のクニの南に位置するクニグニは筑後川という天然の緩衝地帯を越えた南側なのだ。相手のクニまで7キロも離れている。隣国を警戒するのであれば、なぜ隣接する西方の基肄や東方の朝倉には呪禁していないのだろう。

そう見てくると、各クニの祭器埋納地はクニの境ではなく、クニの中核部の聖地に埋納されたと考えた方が妥当のように思えてくる。祭器埋納がクニの王都の聖地で行われたとすると、寺沢氏の言う、数多くの戦死者を出したクニグニと結びつけて祭器埋納は隣国への呪禁であるという論は破綻してしまうのではないか。別の原因を探すべきではないかと思う。

『太宰府天満宮の地宝』（九州国立博物館、市元壘氏執筆）によると、青銅器の出土状況は、次のようである。

「青銅器は、ことにそれが武器としての役割をのこしている段階は、副葬品として甕棺や石棺におさめられることも多かったようです。ところが祭器としての性質が強まると、人々の生活圏から少し離れたような場所でみつかることが多くなります。その様相はじつに多彩、たとえば、山に埋められる場合でも、それが山頂や尾根上であることもあれば、斜面上や、山裾の場合もあります。平野部に埋められる場合も、集落内とおぼしき場所であることもあれば、集落の周辺や、むしろ海辺というべき場所のこともあるのです。このうち、武器に由来する青銅祭器についていえば、丘陵部での出土が全体の八割ほどを占め、なかでも丘陵斜面と丘陵上、段丘上が群を抜いて多いことがわかっています。けれども、そこになんらかの規則性を見出すのはなかなか困難です。しかし、こう

した青銅器の多くが開墾や工事の際のいわゆる不時発見によるという事実を考えますと、こうした青銅器が、現代の私たちからすれば、『思いもよらない場所』に埋められるという点で共通しているということだけは確かなようです」

寺沢氏は、クニグニ間の戦争と関連する事柄として2世紀末の「倭国乱」があったとする『魏志』倭人伝の記述や、発掘調査で見つかった高地性集落の出現もクニグニの争いが原因で、高地性集落については、

「このようにみてくると、高地性集落とは各地域の部族的国家（この場合はクニ）が自らの共同利害を守るために、そして他国に対して自立権を明示するための施設であることがわかる。」

そして、「実際には、北部九州と瀬戸内、近畿諸国などの間で長距離間戦争が勃発した様子はない。」（下線は筆者加筆）

と各クニグニが隣国同士で争っていたと想定されている。

私は、瀬戸内海沿岸各地における高地性集落の出現は、前1世紀から3世紀にかけて3回、100年から150年の間隔で出現していることから、南海トラフ地震が原因ではないかと想定している（『記紀より読み解く〔魏志〕倭人伝とその後の倭国』海鳥社、2019年。）

これについては、その説の進展を含めて後述するが、図1の祭器埋納状態をながめて、この祭器埋納も地震と関係するのではないかと思った。私は福岡市に住んでいる。市の中心を南北に走る警固断層がある。2005年に起きた福岡県西方沖地震にも遭遇した。その時、断層の東側と西側では揺れに大きな差があり、東側が大きく揺れる範囲が広がったのに対し、西側は目立って少なかった。地盤の強固さの違いだった。福岡市天神の福岡ビルの外面の窓ガラスが一斉に割れ落ちる衝撃的な映像がニュースで流れたが、地震発生時、私は糟屋郡篠栗町の巨大な涅槃像で有名な南蔵院（警固断層から東へ10キロ）にいた。そこでは多くの人が地震と気づかないほどのわずかな揺れで何の被害も生じなかったのである。

図1の祭器埋納の位置をながめて、警固地震で揺れた範囲と同じではないかと思ったのである。銅矛9本が埋納されていたバンジャク遺跡は警固断層の真上に近いし、銅戈48本が埋納されていたという原町遺跡も警固断層とは数百mしか離れて



震度分布図は気象庁作成

図2 警固断層福岡西方沖地震の震度分布

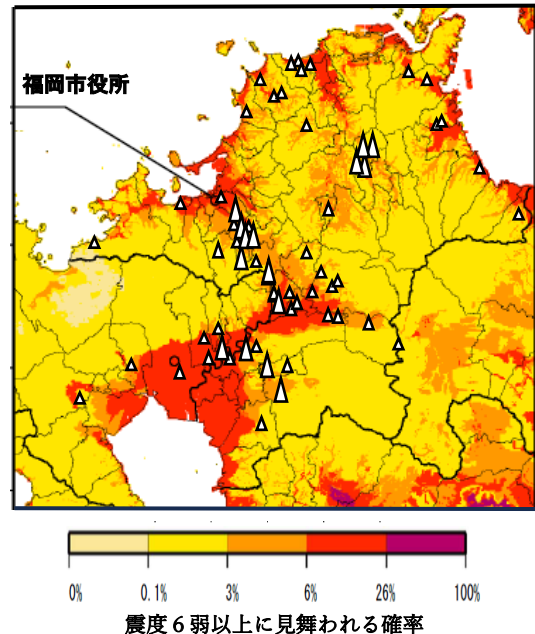
いない。

そこで、図2のように、気象庁が作成した2005年発生の福岡西方沖地震の推定震度分布図に祭器埋葬地点を書き入れてみると、検見谷遺跡を含めて揺れの激しい地域に入っていることがわかる。

図3は、政府・地震調査研究推進本部が作成した福岡・佐賀県の「今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率」を示す確率論的地震動予測地図に島根県教育委員会が1996年に発表した報告書「出雲神庭荒神谷遺跡」の中で示された全国の埋納祭器の出土地名表などの資料から得た祭器出土地を記入したものである。地震動予測地図の分布は、揺れやすさの分布とは定義が異なるが、図2の震度分布を見ても分かるように、確率の小さいところは揺れにくいことと直接的に関連するので、揺れやすさの分布と考えると大きな違いはないように思われる。ただ留意すべきことは、予測地図は今後30年間のことであり、祭器埋納は紀元前2世紀から2世紀までの400年間であり、期間が長いのでより多くの各地断層帯の活動が見込まれることである。つまり予測地図で震度が小さいところでも、その地点の近くの断層あるいは浅い震源地が活動すれば大きな地震動となると考えられるのである。なので、図4のような各地の活断層帯、浅い地震源の活動の情報も必要になる。

図4に示す福岡県の活断層、小倉東、福智山、西山、宇美、警固南東部、日向峠-小笠木峠の各断層帯は少なくとも過去数千年は活動していないと判断されている(地震本部「福岡県の地震活動の特徴」)。また南海トラフ地震の福岡県で生じる震度は最大3程度(図9)であり、大きな影響はないとみられる。したがって、弥生時代、福岡県に及ぼした近くの断層の活動は警固北西部断層だけのようであることがわかる。

図3で福岡平野地域は、地震に対しても揺れ



震度6弱以上に見舞われる確率  
地震動予測地図は地震調査研究推進本部作成  
△は武器形祭器、大は4本以上、小は1本  
図3 福岡・佐賀県の確率論的地震動予測地図と埋納青銅祭器の出土地



図4 福岡県の活断層と過去の震源地



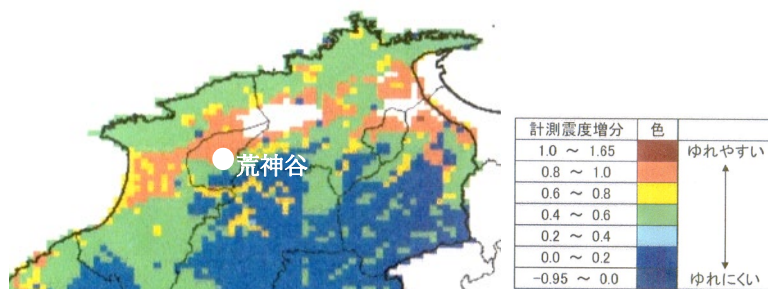
る所は割合狭く、西の福岡市西部（早良国）、糸島市地域（イト国）、唐津市（マツロ国）、東の粕屋郡（粕屋国）、はあまり揺れないことが見てとれる。福岡平野西方の福岡西区と糸島市には墓からの青銅器出土が25カ所（前掲島根県教育委員会）も掲げられているのに対し、石橋茂登氏（前掲論文）が埋納と認めておられるのは2カ所のみである。そのことは、寺澤氏が「興味深い」と言われるところの福岡市の西方や東方に祭器埋納がほとんどない（少ない）ことと合致している。

福岡平野の祭器埋納状況からその理由を考えると、大地を揺るがし、建物の破壊はもとより、田畑に亀裂を生じさせ、山の斜面に大きな土砂崩れを起こし、当時の人々を恐怖に陥れた大地震に対して、その修復が終わったあと、大地の神に対して、神宝である祭器の霊力をもって、二度とここでこのようなことが起こらないように念じて埋めたのではないかと考えることができる。大地の揺れを鎮める姿勢としてはその刃を下に向ける、つまり、大地を揺るがす神に刃を向ける、という姿勢が最も効果的な姿勢と考えたのだろう。したがって、祭器埋納は、大地の神が宿ると考えられる聖地、あるいは、大地の揺れの激しかった田畑の地割れ、山崩れなどの損害の激しかった所で、九州国立博物館の市元壘氏のいうように「丘陵に多いが思いもよらない場所」から出土するということになるのであろう。

祭器埋納の理由は他にも種々考えられるであろうが、福岡平野については警固断層帯地震をはじめとするいろいろなところを震源とする地震に対して、それを恐れ鎮めるためあるいは再度起こらないように祭器埋納が行われた、とするのが、埋納場所が地震の揺れの激しいところに集中し、その他の所に埋納されないという状況から適切な比定だと考えられる。少なくとも原因を地震とすれば、ほとんどすべてのことが都合よく説明できる。大地の神の怒りを感じるのは地震がその最大のものであろう。

それでは他の地方はどうであろうか。

## 島根県地方の祭器埋納について



「島根県の揺れやすさマップ」より。「白丸」・「荒神谷」は筆者加筆

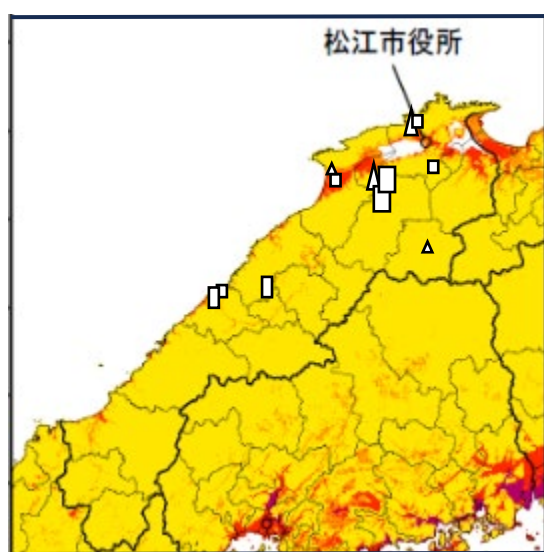
図5 出雲地方の地震揺れやすさマップ

中細形銅剣 358 本、銅鐸 6 個が出土した島根県出雲市斐川町神庭の荒神谷は、その地名「神庭」から出雲国では「神の住む聖地」と考えられていたところであろう。「神庭」とい

う地名は全国いくつもある。荒神谷は斐川が作った平地のすぐ脇にある。つまり出雲国の中心地だったと考えられる場所なのである。決して国境に位置しているわけではない。銅剣の形状が中細形であることから、埋納されたのは、寺澤薫氏の言うところの「マツリの第Ⅱ段階」つまり、紀元前1世紀後半～1世紀前半とみられている。出雲国も地震の比較的多いところである。斐川が土砂を運んでつくられた平地は揺れやすく、度々の地震に恐怖を抱き、揺れる大地を鎮めるために、祭器を集めて、国の聖地（国の神が住む所）に埋めて鎮静を祈った、と想像することができる。

図5に荒神谷以外の島根県で出土した埋納地点を示している。図6に同県の活断層と過去の地震源が記載されているが、島根県とその周辺にM5.5以上の浅い地震源の地震が実に多数回起きている。これは、ここ150年間くらいの最近のことであるが、地震は地球の性質なので2000年前であってもこの傾向に変わりはないであろう。

しかし、この「マツリの第Ⅱ段階」つまり、紀元前1世紀後半～1世紀前半は後で示すように南海トラフで過去最大の巨大な地震が発生したとみられる時期にあたるのだ。その影響も大きいと考えられる。



□ は銅鐸、大は4個以上、小は1個

図6 島根県の祭器出土地

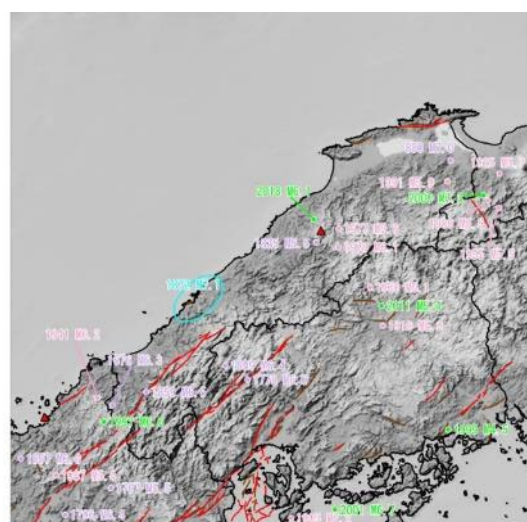


図7 島根県の活断層帯と震源地

## 高地性集落との関係

この「マツリの第Ⅱ段階」の時期は、寺澤薫氏の言うところの「第一次高地性集落の発生」時期と一致している。氏はつぎのように言われている。

「マツリの第Ⅱ段階の銅鐸が第一次高地性集落のすぐ近くで発見されることがままある。岡山県倉敷市種松山遺跡、香川県坂出市明神原遺跡、三木町白山遺跡、和歌山市橘

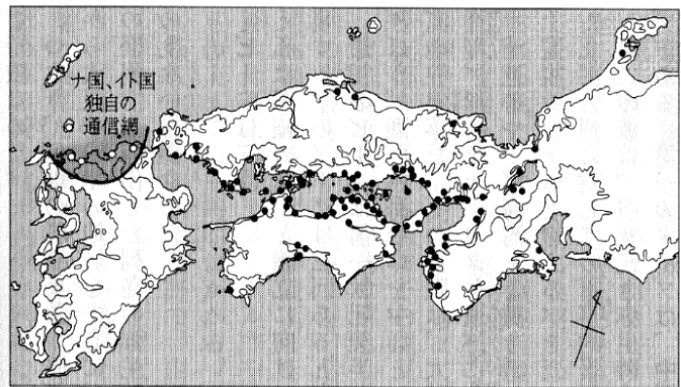


谷遺跡などはその典型で、中期後半でも末にピークをもつ高地性集落ばかりだ。眼下の平野に本拠を置くクニの危機感が頂点に達したとき、出先の高地性集落近くの山腹に、呪禁の意味を込めて銅鐸は埋められたのだろう、と私は考えている。

だから、第一次高地性集落は、攻める方ではなくあくまで守る方のものだ。このように見えてくると、高地性集落とは各地域の部族的国家（この場合はクニ）が自らの共同利害を守るために、そして他国に対して自立権を明示するための施設であることがわかる。」（下線は筆者加筆）

私は、高地性集落の発生も南海トラフの大地震にその原因があると考えている。大地震が起きると「高台に逃げろ」というのは後世では常に言われてきたことである。沖積層の厚い平地では地震による揺れが激しく海の近くでは津波の恐れがある。山裾はがけ崩れのリスクが大きい。比較的安全なのは丘陵や山の頂上、尾根なのである。そこは地下が岩盤であることが多く地滑りが生じにくいので崩れにくく、かつ揺れが少ない。だから大地震で被害が出ると山頂や丘陵上へ逃げ、そこに留まることになるのだ。世代が代わり大地震の記憶が薄れると不便なので下に降り、また地震が起きると高地へ移る。それを繰り返しているのだと思う。それは現代でも繰り返していることなのだ。先に示した地震動予測地図は「今後30年間に震度6以上の地震の起きる確率」を示すもので、予測される主な地震の確率は、南海トラフ地震70～80%、安芸・伊予・豊後灘40%である。図9及び図10は政府中央防災会議の示した南海トラフ地震の震度予測と沿岸の津波高さの予測図である。

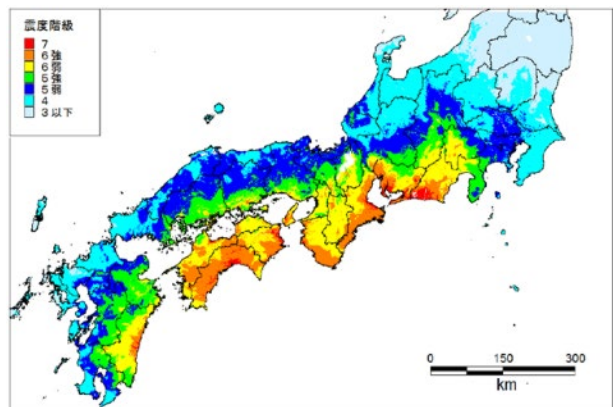
高地性集落の発生が瀬戸内海沿岸に多いのは、そこに住む人口が多いのと、津波の影響だと思う。南海トラフ地震では2012年に内閣府が出した予測では、図10に示すように瀬戸



第1次高地性集落の分布 中期後半から後期初め（前1世紀後半～1世紀）にかけて作られた典型的な高地性集落は、ほとんどが瀬戸内海沿岸に密集する

寺澤薫「政権誕生」より

図8 第一次高地性集落の分布



地震調査研究推進本部作成

図9 南海トラフ地震による震度分布予想

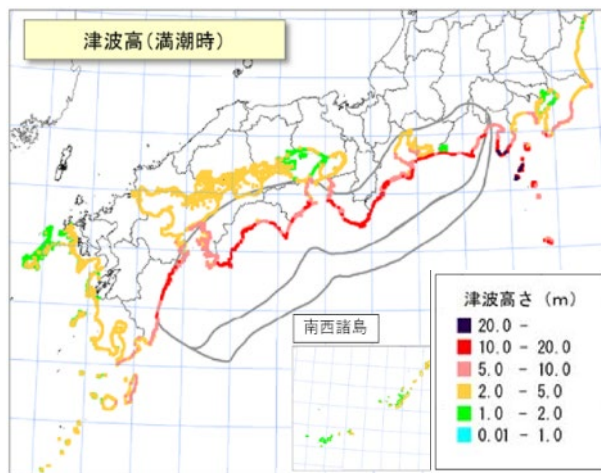
高地性集落の発生が瀬戸内海沿岸に多いのは、そこに住む人口が多いのと、津波の影響だと思う。南海トラフ地震では2012年に内閣府が出した予測では、図10に示すように瀬戸

内海沿岸でも 2～5 m の津波が想定されている。そういう津波が来れば、堤防のない時代なので沿岸平野の水田は全滅したであろう。津波でなくても、図 9 に示すように、瀬戸内沿岸は震度 5 強の振動に見舞われる可能性があった。震度 5 強は平均的値で、地質によってより大きな震度に見舞われる地域がある。図 11 に安政南海地震の津波高さ分布を示す。南海トラフ地震が東海地震と連動せず、単独で活動した場合は津波高さの大きな範囲は四国・紀伊・瀬戸内・豊予海峡に限られ、東海方面には及ばないことを示している。地震動の激しさも東海地方では小さかったと推定できる。寺澤薫氏の言うところの第一次高地性集落の発生も南海トラフ地震のみであったと考えられる。

宝永地震 (1707 年) における各地の推定津波高さは、高知沖 15～18m、徳島市 6～7 m、大阪市 2.5～3.6m、岡山市 3 m、高松市 1.8～3 m、徳山市 1.5m、遠く離れた長崎市でも 2～3.5m の津波が押し寄せ大きな被害が報告されている。大坂では溺死者 7000 人余という記録もある。地震動による被害も、大阪で家屋全壊 1000 棟余という。

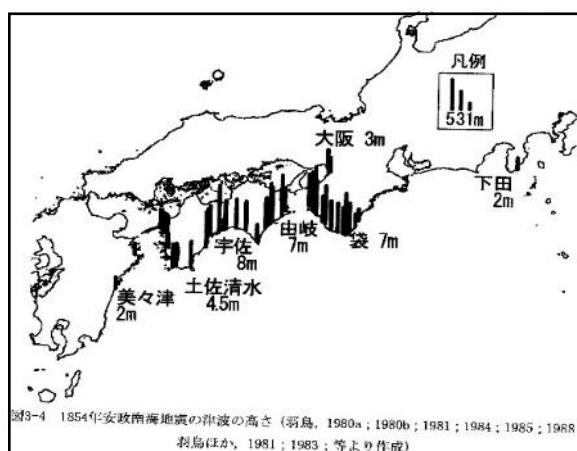
そして、岡本眞・松岡裕美両氏 (「津波堆積物・南海地震の繰り返し」科学 Vol.82, No.2. 2012 年 2 月) によると、高知県土佐市宇佐にある蟹ヶ池の底の堆積層をコアリングして 2000 年前までの地層を調べ、約 2000 年前の津波堆積物の層は有史の中では最大とみられている 1707 年の宝永地震の津波堆積物層よりも厚く、「宝永地震と同じか、もしくはそれ以上の規模であった可能性がある」と述べられている。

この地震堆積物の調査は産総研 (産業技術総合研究所) でも行われているが、合わせると九州東岸の佐伯市竜神池から四国南岸紀伊半島西岸の各地には 2000 年前に地震堆積層が見られるがそれより東ではあまり見られない (「地震調査研究推進本部、南海トラフの地震活動の長期評価 (第 2 報) 概要資料」)。したがって、2000 年前のこの地域の地震は南海地震がとても大きく、東海地震はなかったか、もしくは規模が小さかったと考えられる。



政府中央防災会議作成

図 10 南海トラフ地震による津波高さ予想



地震調査研究推進本部資料より

図 11 安政南海地震の津波高さ分布

大地震が発生すると津波や山崩れが発生する。その津波からの避難のために丘陵上や山の頂・尾根に住居を移し、永住を図った結果、沿岸に高地性集落が発生したと考えると、その状況をよく説明できるのである。

山裾・崖下に構えた住居は山崩れ・がけ崩れに会い被害甚大であったであろう。高地性集落が海から離れた内陸でも起きるのは山裾に構えた住居が大地震によって山崩れ・がけ崩れに遭遇したからだと考える。

マツリの第Ⅱ段階、つまり銅鐸や銅戈などの大量埋納が中期後半の末、つまり1世紀中頃に発生した高地性集落と一致していることは、その頃に瀬戸内海沿岸に地震による揺れと津波が襲ったことが考えられるのである。

## その他の地域の状況

### 兵庫県の場合

兵庫県では、地震本部の「兵庫県の地震活動の特徴」において、地震予測地図に考慮された地震は南海トラフ地震 70～80%がおもなものであるが、1995年に起きた淡路島西岸断層帯 (M7.1程度)の活動間隔が1800～2500年と推定されているので、前2世紀から2世紀 (1880～2400年前)の弥生時代に一度活動した可能性が高い。また六甲山地・淡路島断層帯 (M7.9程度)の活動間隔が900～2800年と推定され、最新の活動が16世紀とされているので、一つ前の活動は前12世紀から7世紀の間ということになり、これも弥生時代に活動した可能性がある。淡路島南部の南あわじ市松帆で2015年7個の銅鐸が発見され話題になった。それより前1966年には松帆古津路地区から銅剣14本、江戸時代に松帆慶野中から銅鐸8個が出土している。なぜこんなところに？という議論になっていて、結論がでていない

ようだが、大地震の発生に対して、今後起きないように祈願する行為として被害のあった場所に埋納したと考えるならばすなりと説明できるのではないか。図12を見ればわかるように南あわじ市の平地はとても揺れやすい場所なのである。弥生400年間に南海トラフ地震が2～3回、それに淡路島西岸断層帯、六甲・淡路島断層帯の活動もあった可能性が高くなると全部で4～5回の大地震に見舞われた可能性が高い。地震程人々に恐怖を与える自然現象はない。

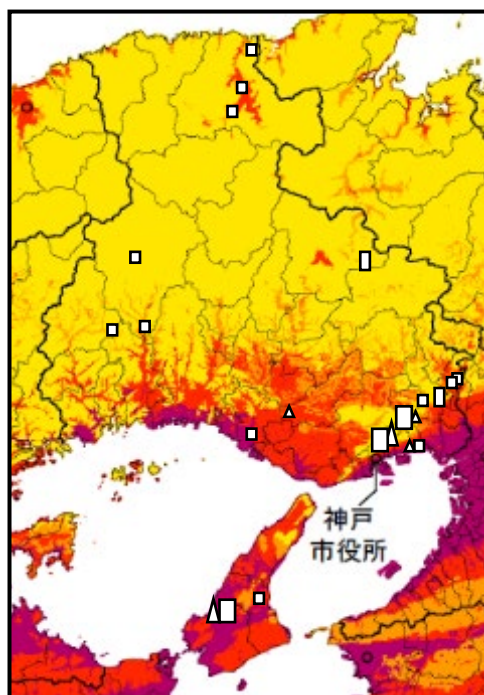


図12 兵庫県の祭器出土地



神戸地域を見ると、埋納地が南西端の神戸市灘区桜ヶ丘遺跡より東北へ向かって列状にならんでいる。それは大阪府にまで延長して連なっている。そこはまさに六甲・淡路島断層帯から有馬・高槻断層帯へと続く断層帯の上なのである(図13)。有馬・高槻断層帯(M7.5程度)の活動間隔は1000~2000年、最新の活動は1596年の慶長伏見地震とされているので、その一つ前の地震は前400~600年となり、この断層帯も弥生400年間に活動した可能性があることになる。

日本海側の兵庫県北部をみると、山田断層帯の活動は古く活動は不明であるが、北部一帯は、図13に示すように浅い震源地の地震が頻発している場所であることがわかる。揺れやすい場所では被害がでたであろうことがわかる。

このように兵庫県のほとんどの祭器埋納は地震に対する埋納で説明することができる。



図13 兵庫県の活断層帯と過去の震源地

## 岡山県と香川県

地震調査研究推進本部の資料によると、南海トラフ地震による過去の被害は、岡山県においては、1707年宝永地震(M8.6)では、「大地震と大風浪あり。住家全壊あり。死者多数」。1854年安政東海地震・安政南海地震では、「津波あり」。1946年昭和南海地震では、「死者51人、負傷者187人、住家全壊478棟」とある。

香川県では、宝永地震「死者28人、家屋倒壊929棟、五剣山の一峰崩落、津波あり」。安政東海・南海地震「死者5人、家屋倒壊2961棟」。昭和南海地震「死者52人、住家全壊317棟」と記録されている。

主な影響はやはり南海地震であろうが、香川県の南に中央構造線断層帯があり、その活動は次のようである。

讃岐山脈南縁東部区間(M7.7程度)活動間隔900~1200年、最新の活動16世紀

もう二つ前の活動は2400~1800年まえ(前8世紀~前2世紀)

讃岐山脈南縁西部区間(M8.0以上)活動間隔1000~1500年、最新の活動16世紀

一つ前の活動 1世紀~6世紀

石鎚山脈北縁区間(M7.3程度)活動間隔700~1300年、最新の活動15世紀

一つ前の活動 2世紀~8世紀 二つ前の活動 前11世紀~1世紀

豊予海峡・湯布院区間（M7.8 程度）活動間隔 1600～1700 年、最新の活動 17 世紀

一つ前の活動 前 1 世紀～1 世紀

となっているので、弥生 400 年の間に一部が活動した可能性がある。

この地域の祭器は武器形と銅鐸が混在している。

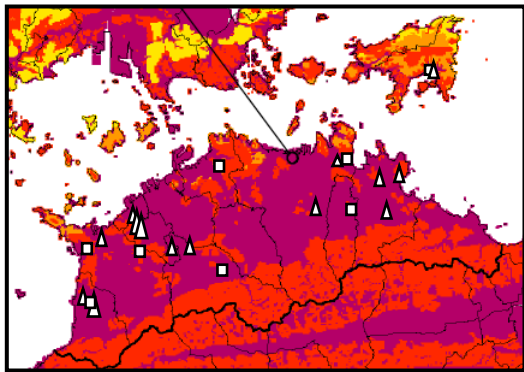
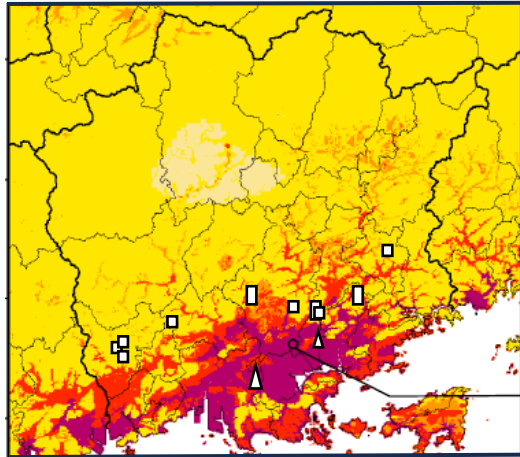


図 14 岡山県・香川県の祭器出土地

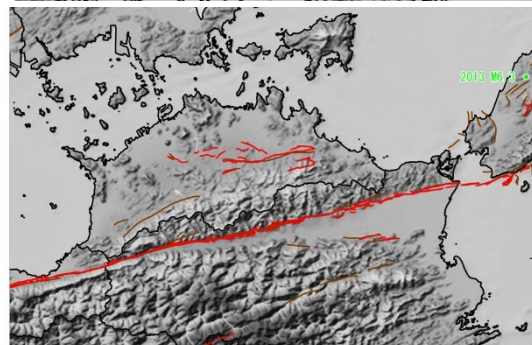
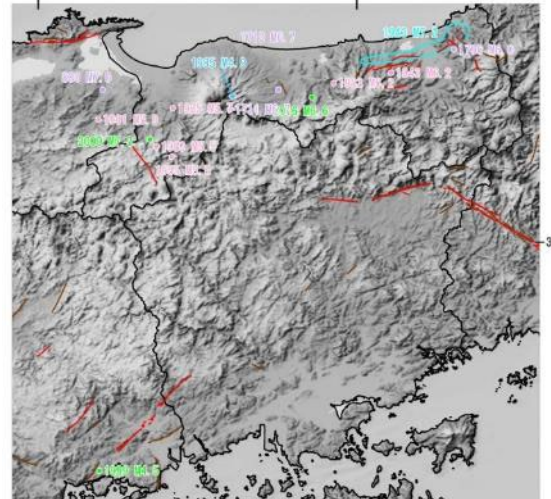


図 15 岡山・香川県の活断層帯と震源地

注目すべきは、現在の岡山市街のある岡山平野は標高が低く弥生時代は海であり児島半島は当時陸地とは離れた島であったと考えられている。吉備で栄えたところは造山古墳や作山古墳、吉備国分寺のある地域であった。そうであるから、この地域の耕作地は狭く多くの住民を収容することは困難とみなされる。ところが、対岸の四国讃岐地方（香川県）には広大な平野、讃岐平野がある。ここは標高が高く古代においても陸地であった。現在は水不足で悩まされる地域であるが、古代の規模の田地ならば小河川の水量でも間に合ったであろう。この地は南の讃岐山脈からいくつもの小河川が並行して北に流れ、緩やかな連続した扇状地を形成している。福岡県の糸島市（伊都国）や朝倉市（筑紫平野）、奈良盆地東部もこのような地形となっている。水田は水の出し入れが必要なのでゆるやかな傾斜地が最も水田を造るのに適している。吉備地方に多数の人が住んでいたとすれば、その食糧の供給は香川県からであったのではなかろうか。しかし、この讃岐平野は非常に揺れやすいことが図 14



から読み取れる。そして平野の広い範囲において埋納祭器の出土が記録されている。地震で壊された田地を修復後、二度とこのようなことが起きないように祭器を地中に埋めて大地の神に祈ったのだと考えられるのである。

### 熊本県の場合

図 16 において一見して、わかることは埋納祭器の出土が県北部に限られることである。図ではそれほど確立のสูงくない所でも起きているが、図 17 を見ると県北半では浅い震源地の地震が頻発する所であることがわかる。

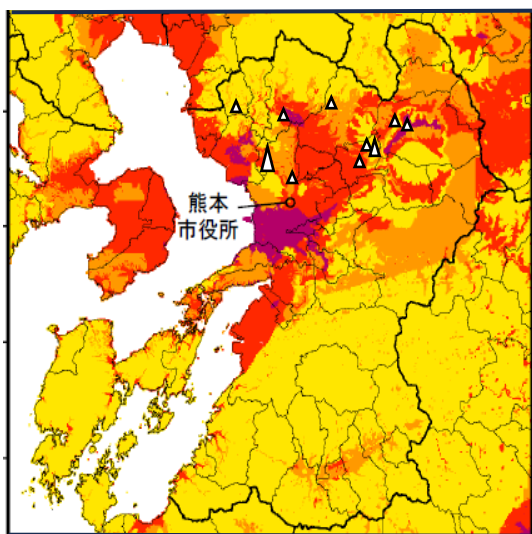


図 16 熊本県の祭器出土地



図 17 熊本県の活断層と震源地

熊本県の南半分には出土がない。宮崎県は皆無である。また鹿児島は志布志市の 1 カ所のみである。1 カ所だけであると、他の地方と同じ趣旨で埋められたのか疑問が生じるので、九州の南半分は祭器埋納はないと考えても良いのではないか。球磨地方（人吉盆地）は、中国呉で作られたとみられる鉄鏡の出土が有名であるが、ここはもともと青銅器や鉄器など金属器の出土の非常に希薄な地である。戦いに必要な鍬などもほとんど出土しない。

『魏志』倭人伝に「卑弥呼女王国の南に狗奴国あり」とある。卑弥呼の治めた女王国の範囲を熊本県の宇土地方まで広げたところのいわゆる「邪馬台国熊本説」があるが、その場合、狗奴国は球磨（人吉）地方を本拠としている。そうすると、女王国と狗奴国とではあまりにも軍事力に差が有り過ぎるのである。女王国は青銅器のみならず、鉄器も豊富なのに対し、狗奴国を球磨地方とするとここでは金属兵器はほとんど見つからない状態なのである。『魏志』倭人伝では女王国は狗奴国に苦戦しているのである。そのような状況からみれば、狗奴国熊本説がもっとも状況がよく合うのである。狗奴国の将、狗古智卑狗は「キクチヒコ」と音が近く、熊本県北部の菊池地方に本拠を置いていたとすれば、女王国と狗奴国の境は南

の菊池川、北の矢部川に挟まれた筑肥山地となり、それは現在でも福岡県と熊本県の県境になっている。菊池地方は青銅器のみならず、鉄器の出土も筑紫に引けを取らないほど豊富に出土している。軍事力が女王国と拮抗する勢いとなっていたであろう。狗奴国熊本県説は、安本美典氏、奥野正男氏、菊池秀夫氏、宝賀寿男氏、丸地三郎氏など、すでになりに多くの人が提唱されている。私は、菊池地方はかつて弥生中期には甕棺墓を墓制とする筑紫（福岡県）の勢力が進出していたが、その菊池に進出した首長はその後熊本平野の人達との絆を強め、交易上は筑紫を通して青銅や鉄などの金属材料の輸入は継続できていたが、政治的には、次第に筑紫とは疎遠になっていたのではないかと考えている。2世紀末頃、倭国乱が生じた。乱後も筑紫をまとめることのできる王が出現しないのを見て、菊池の王・狗古智卑狗が筑紫に進出しようとしたのが次の乱の始まりで、筑紫の豪族たちは急遽巫女の卑弥呼をまとめるためのシンボリックな王に共立し、そのもとで合議によって政治、つまり狗奴国と対峙したのだと思う。女王卑弥呼は狗奴国との対峙の中で生まれ、そして死んでいった。私は、2023年3月の投稿論文「『魏志』倭人伝行程 複数史料と陳寿の困惑」で示したように、『魏志』倭人伝の日程記事は266年の台与の西晋朝貢時に帯方郡が使者から聞き出したもので、邪馬台国は台与の都であり、そこは台与が東遷後の近畿纏向の地だと考えている。だから、卑弥呼は戦争に明け暮れ、筑紫には大宮殿や都・邪馬台国もなかったのである。卑弥呼の住んでいた所は吉野ヶ里遺跡の規模のところだったと思っている。同規模の遺跡は朝倉地方にもあって、卑弥呼は戦況に応じてこのあたりを移動していたとも考えられる。

## 大分県の場合

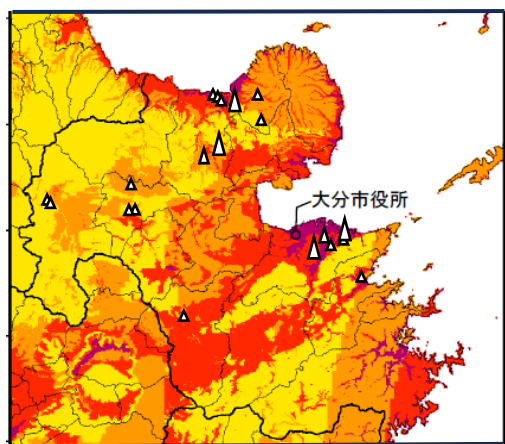


図 18 大分県の祭器出土

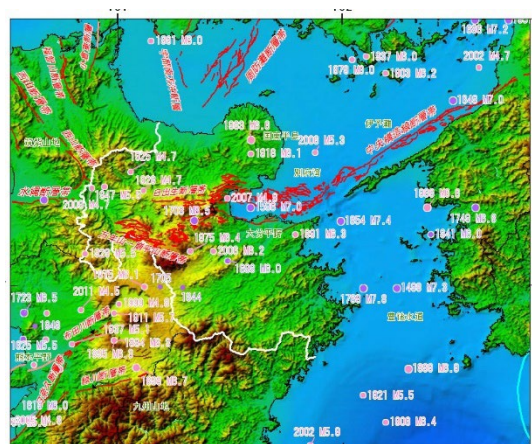


図 19 大分県の活断層と震源地

大分県で注目すべきは、宇佐市付近で多くの祭器埋納があることだ。宇佐地方には、宇佐神宮という皇室に深い関係があると見られているが、その実態はなぞに包まれている神社がある。「記紀」においても、神武天皇が東征（東遷）に赴いたときに宇佐に寄って、宇沙都比古・宇沙都比売の歓待を受けている。また、『日本書紀』景行天皇の熊襲征伐の時に

は、周防国佐波（山口県防府市）から南方を眺めて「南の方に煙が多くたっている。きっと賊がいるのだろう」と、部下に様子を見させられた。宇佐にいた首長の神夏磯媛は「どうか兵を送らないでください。われらの仲間はずぐにでも帰順します。ただほかに鼻垂という悪い賊がいて宇佐の川上（宇佐市を流れる駅館川の上流安心院地方）にいます」と告げたという。この安心院においても2カ所で7本と2本計9本の埋納祭器が見つかっている。弥生時代からかなり大きな勢力の人達が住んでいたことが想像できる。宇佐市とその東に隣接する豊後高田市と合わせると6カ所18本の埋納祭器の発見がある。古代この地方が栄えていたことを伺わせる資料となろう。景行天皇の熊襲征伐も全くの架空の話ではないことが伺われる。

## 寒川氏の地震痕調査研究

寒川旭氏（元通産省工業技術院地質調査所勤務）は、著書『地震の日本史』（中公新書、増補版2011年、2007年初版）で、弥生時代から古墳時代までの地震の痕跡を示す遺跡を調べられている。地層の断面をみると地震の際に生じる液体化現象の痕を見ることができる。水を含んだ砂層が上の粘土層を引き裂き、その上の層に噴出しているのがわかるという。寒川氏の示した弥生各期に発見された地震痕のある遺跡を期毎に整理すると、次のようになる。

- I期の終わりごろ： 久宝寺遺跡・田井中遺跡・志紀遺跡（以上八尾市）、  
池島遺跡（東大阪市）。
- II期末： 原川遺跡（掛川市）、
- II期～III初頭： 針江浜遺跡（高島市）、
- II～IV期： 正言寺遺跡（長浜市）、津江田湖底遺跡（草津市）。
- II～IV期： 八夫遺跡（野洲市）
- III期： 松林遺跡（高松市）。
- III～IV期（紀元前1世紀）： 下内膳遺跡（淡路島東部洲本市）、瓜生堂遺跡（東大阪市）、
- V期初頭（紀元1世紀）： 野島断層（淡路島）、上沢遺跡（神戸市）、
- V期中頃： 林・藤島遺跡群泉田地区（福井市）、
- V期： 二伝寺砦遺跡（藤沢市）、白久保遺跡（茅ヶ崎市）、
- V期中頃： 黒谷川宮の前遺跡（徳島県板野郡板野町）、  
黒谷川郡頭(コウズ)遺跡（同板野町）、
- V期末（2世紀後葉）： 黒谷川宮の前遺跡の2回目の地震。
- 古墳時代（庄内併行期、3世紀前半ころ）： 黒谷川宮の前遺跡の3回目の地震、  
下田遺跡（堺市）、志紀遺跡（八尾市）、

弥生各期の実年代比定は、今なお議論されており、確定されていないのだが、寺沢薫氏の

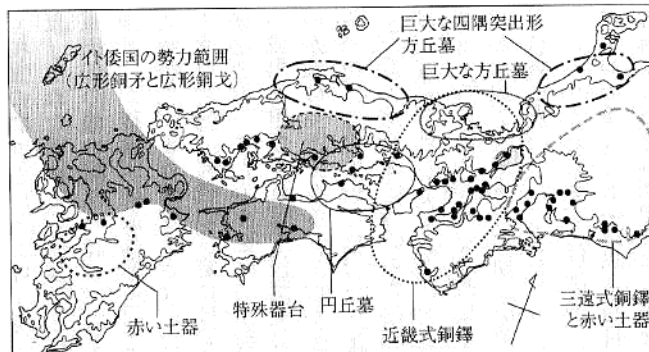
近畿における実年代観（『卑弥呼とヤマト王権』中公選書 2023 年）と比較すると

	寒川旭氏	寺澤薫氏
I 期	不明～前 400 年	前 300～前 170 年
II 期	前 400 年～前 200	前 170～前 110 年
III 期	前 200 年～前 100 年	前 110～前 60 年
IV 期	前 100 年～紀元	前 60～50 年
V 期	紀元～200 年	50～140 年
		VI 期 140～200 年

となっており、寒川氏は弥生時代の始まりが紀元前 10 世紀に遡るという国立歴史民俗博物館の主張を取り入れておられるようなので、寺沢氏の実年代観と随分とずれている。また、地震調査研究推進本部資料がどのような実年代観で示しているのかは知りえていないが、弥生時代の地震発生の実年代を確定することは現時点では困難なのでおよそのことしか言えない。ただ、祭器埋納や高地性集落の発生が周期性を帯ていることから南海トラフ地震との関連を考えることは有効であると思われる。

## 倭国乱

『魏志』倭人伝に記されている 2 世紀末の倭国乱のころに第 2 次高地性集落の発生があり、この時は瀬戸内地方だけでなく広く東海地方にまで広がっているという。図 20 は寺澤薫氏の作成したもので、マツリの祭器などを絡めて記入され、国々が緊張関係にあり、その境界に高地性集落が発生したと推測されている（『王権誕生』2000 年）。しかし、その後寺澤氏は考えを変えられたのだろうか、



【倭国乱】の頃の典型的な第 2 次高地性集落 第 1 次高地性集落に比べて分布が東西に広がっている。新たにイト倭国勢力に接した中部九州や南四国、西部瀬戸内に目立つのと対照的に、東のクニ・国では、それぞれのマツリ圏や文化圏に緊張関係が及び、牽制しあっている

寺澤薫「王権誕生」講談社 2000 年より

図 20 第 2 次高地性集落発生と倭国乱

倭国乱後、国をまとめるために西日本全域の首長の共立によって卑弥呼が倭国王に就任したとされている（『卑弥呼とヤマト王権』2023）。『魏志』倭人伝の中の「イト国王」に関する記述のところで「其の国、本亦た男子を以て王と為し、住(ト)まること七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃(ナリ)ち一女子を共立して王と為す。名づけて卑弥呼という」という記述の「其の国」についてイト(伊都)国王の治めていた連合国であるのを「倭国」と読み替え、そしてその倭国は九州の東方の倭人伝では「倭種」と記述されていた地域も含め

た諸王によって共立されたというのである。「其の国」の中身が初めと後では全く異なった地域を指すことになり、承認し難い。私だけでなくかなり多くの人がそう感じている。図 20 に示されるように、各地域では祭祀の様式が異なり、それぞれ異なる文化が確立しているのである。そのような地域にたとえ卑弥呼が呼びかけたところで、それまでの文化を捨て簡単に卑弥呼にしたがい共立しようという空気になるとは思われないのである。

三世紀になって突然奈良盆地東南部の纏向地域にヤマト王権の祖と見なされる都市が出現したことを解するために考えた案だと思われるが、そう考えることで、ヤマト王権誕生に際して北部九州との戦争がなかったことは説明できるが、三世紀になっても北部九州の鉄優勢はかわらず、ほとんど九州の東方には鉄器は普及しなかったことは説明できない。そして卑弥呼が苦戦した狗奴国を東日本に設定することも『魏志』倭人伝の記述と異なること、帯方郡から救援に来た張政は北部九州から先へ行った形跡がないことなど説明困難なことがまだ多く残るのである。

「倭国乱」、それは南海トラフ地震や東海地震などの自然災害の結果として説明できるのである。

2 世紀末、中国では黄巾の乱のころ人口が 10 分の 1 に激減したと伝わる。その原因は戦乱による田畑の荒廃という説もあるが、そうではなく天候不順がその原因と考える。戦乱で田畑が荒らされるとしても、戦場となる場所は限られるので、それは全体からみれば、かなり小さい部分的荒廃に過ぎないだろう。戦乱による戦死者は戦争に駆り出される兵士は人口の十分の一〜二程度とみなされるので、戦死者は人口の激減にはほとんど関係しない。ところが、広範囲の比較的長期の天候不順は作物の収穫が激減し大飢饉を生じさせる。例えば作高が半分に減ったら単純計算でも人口の半分が餓死する。実際は餓死する人も死ぬまでにかかなりの量の食料を消費するので、生き延びられる人は半分よりはるかに少なくなるはずだ。天候不順の一因としては、南半球ではあるがニュージーランドの VEI 7 級（阿蘇外輪山を形成した爆発と同程度）のタウポ湖火山爆発が 181 年にあり、その噴煙は上空 51km のぼり、成層圏の上部（約 50km）まで覆ったという。南半球では噴煙で覆われ太陽光を遮るので気温が下がるが、北半球では逆に上昇した可能性があるという（近藤純正 HP「火山噴火と冷夏」2022 年）。中国北部の内陸では大旱魃が起これば食物が採れず、大飢饉に陥ったと考えられる。

日本では海があるので気温が上がると海上から蒸発する水分が増加し、大雨洪水が激しかったのではないか。それに日本では南海トラフ地震と東海地震が連動して発生した可能性が高い。高地性集落が瀬戸内地域から東海地方にまで広い範囲で発生しているからだ。

大地震による津波と大雨洪水で水田が広範囲に荒らされ、瀬戸内沿岸全体が食糧不足に陥った可能性は十分にあるのだ。日本を統一している政権が有れば他からの援助が働くが、そういうものがない時代には相互扶助は起こらず食糧の奪い合いの戦乱が起きる。そのようなことであつたのではないか。

それは、寺澤薫氏の言うところの「倭国乱」の様相、つまり、①瀬戸内沿岸から東海方面



までの幅広い高地性集落の発生、②祭器の埋納、③北部九州の鉄器優勢変わらず、④大規模な争乱ではなく近くのクニ同士の争い、という現象、および、「三国史記」新羅本紀 193 年の「倭人大飢饉」という記事は、南海トラフ地震・東海地震の同時活動、天候不順という自然災害によるものとするだけで、すべてが都合よく説明できることになる。

## まとめ

弥生時代に生じた武器形祭器や銅鐸という祭器を大地に埋める埋納という行為について、全国の、今まで発見された祭器の埋納場所を地図上に書き入れると、それは地震に対して被害の発生しやすい場所、すなわち、地震に対して揺れやすい場所であり、埋納された場所が山や丘陵の斜面に多く、人家や田畑のある平地でも見られるが、その場所は聖地と考えられる場所など特定の規則性の認められる場所でもない、思わぬところから出土すること、しかし、地震に際して揺れの激しい場所にあるという規則には則っているという事実が判明した。武器形であれ、銅鐸であれ祭器埋納は地震に際して被害のあった場所を修復したのち、祭器の霊力で二度とそこに被害が生ぜぬように祈念して埋められたものと考えられる。

マツリの段階や高地性集落の発生の時期と地震についてまとめると、およそ

マツリの第一段階： II～III期の地震： 前2世紀後半

マツリの第二段階・第1次高地性集落の発生： III～IV期の地震： 紀元ころ

マツリの第三段階初頭： V期の地震： 1世紀後半

第2次高地性集落の発生・マツリの第三段階・倭国乱： V期末の地震：  
2世紀末、180年代

ということが想定され、約 80～130 年くらいの間隔で発生していることから、これは南海トラフ地震と東海地震発生の間隔と酷似しており、祭器の埋納や高地性集落の発生は、ほぼこの地震と関連して生じたのであろうことが推測される。

倭国乱についても、寺澤薫氏の言う「倭国乱」の様相であるところの、瀬戸内沿岸から東海方面まで幅広く高地性集落の発生したことや、祭器の埋納、北部九州との関りでは北部九州の鉄器優勢の状況は何ら変わらないこと、乱は大規模な争乱ではなく近くのクニ同士の争いと想定されること、そして、「三国史記」新羅本紀 193 年の記事に「倭人大飢饉」と記されているという状況は、南海トラフ地震・東海地震の同時活動、天候不順という自然災害が原因とすると、すべてが都合よく説明できる。

「倭国乱」や「高地性集落の発生」の考察に「大地震」などの自然災害に原因を求めるという観点は不可欠のものとする。